

「詠百首和歌」解説と翻刻

— 佐河田昌俊資料 —

渡 辺 憲 司

〔解説〕

本稿で翻字を試みたのは、近世初期を代表する武家歌人の佐河田昌俊の歌百首に、中院通村が批点した「詠百首和歌」一巻である。

底本に使用した天理図書館蔵（整理番号²⁶ 91.431翻刻番号256）の「詠百首和歌」は、はなだ色、無地の表紙（縦二十六・六糎、横十九・二糎）で、表紙左上に、うすくもり模様の原因箋がある。外題は「華御昌俊百首點取」、内題に「詠百首和歌」とある。墨付十二丁。その書体等から江戸時代末期の写本と思われる。

佐河田昌俊の「詠百首和歌」が、天理図書館に蔵されていることについては、既に井上宗雄先生が、「雅庸卿詠草」ほか「中世歌書管見」（「和歌史研究会会報第68号」昭和五十三年十二月）において、「天理図書館の普通書中で、小堀遠州や佐川田昌俊の詠草など珍しいものだが」とふれられている。

天理本「詠百首和歌」の他に、卷子本の「詠百首和歌」の存することも知られている。「思文閣墨蹟資料目録、第三十五号」（昭和四十六年九月）と「京都古典会創立五十周年記念古典籍大入札会目録」（昭和五十六年六月）にあがっているものがそれである。二つ

の目録にあがっているものは、同じものであり京都古典会の目録には「四季恋雜自詠百首和歌、中院通村批点書入、紙高二十三糎長尺卷子仕立^{大倉汲水箱書}三重箱入」と説明がある。

二つの目録には、それぞれ巻頭、巻末の部分の写真が掲載されている。天理本「詠百首和歌」との比較のために、その掲載分を次に翻字しておく。

詠百首和歌

春二十首

歳中立春

もろ人のいそく心はあら玉の

年のこなたに春を待えて

山霞

ふきとふくあらしの山も時ありて

春にまけたる八重かすみかな

春雪

半天にふるとはみえて草も木も

「詠百首和歌」解説と翻刻 — 佐河田昌俊資料 —

花なき庭の春のあは雪

朝鶯

朝またきおきても真木の板戸をは
たゝさなからの庭のうくひす

沢若菜

春はまた浅沢水のふかねせり
水を分てたれか摘らむ

餘寒

春来ても雪かきくらしふるとしに
かはらてそらのさむけきやなそ

梅薫風

玉たれのひまとめて入春風に
闇のふすまはむめかゝそする

行路柳

みちのへの柳のえたにみゆるかな
(以上、京都古典会古典籍大入札会目録)

杣人のいりぬる方ぞ知られける

このみをなかつ谷川の水

岸苔

かけうつす岸のひたいにむす苔の
みとりに水もなかれてそゆく

山家水

柴の戸にいつきなれん世間の
うきにかへたる山河の水
(すみ之)

山家嵐

ふかくわかおもひりたる山さとに
ころみかほの夕あらしかな

田家雨

三句茅屋口口思やられ参風之

もる雨に又しきかへん方もなし

小田のかりほの床のさむしろ

旅行

海山のふかきあはれをなをさりに
思はゝたひはさそなうからむ

旅宿

松も松岩ねもいはねさなからの
みやこにかはる庵やしめまし

旅泊

いまそきく見ぬもろこしの鐘の声
波にうきねのあかつきのそら

海眺望

見てそ思ふまたみぬ人のいかならん
すまのうみへのあはちしま山

寄社祝

もろ神のやしろくくに榊葉を
さしてそいのる君は千世ませ

寄日祝

天津日あきらけきにて思ひしれ
八隅をてらす君か御影は

汗墨三十首 通村
(以上、思文閣目録)

天理本「詠百首和歌」は、九十九首であって一首脱落しているが、その箇所が卷子本「詠百首和歌」によって知ることが出来る。それは、思文閣の目録の写真版に掲載されている「旅宿」の歌である。すなわち、天理本に付した通し番号⑩の旅宿の歌は、次の「旅泊」の歌としてあるべきものが誤写されたのである。

また、天理本の巻頭にある昌俊に対する注記、及び巻末の通村に対する注記は卷子本にはない。卷子本の方がより原本に近いものと思われる。但し、卷子本が自筆本であるか否かは、写真掲載が部分的であることもあって、判別しがたい。「日本書蹟大鑑 第十六卷」(小松茂美編 講談社)や「名家手簡 九集」に所収の昌俊の筆跡とは異なるように思える。

卷子本と天理本では、仮名づかいの用字なども異なっているが、中院通村批点の部分などは同じである。

中院通村が佐河田昌俊の歌に批点したことは、「当春、中院大納言通村卿正保四年、詠草を差上げ、御添削を奉願候ひし、此歌も其一巻の中に御座候由申て、則、其の詠草を差出す」といった話が、「翁草」巻五に見えている。この話の中の「此歌も」とは、著名な「吉野山花咲く頃の朝な〜」心にかかる峯の白雲」の歌であるが、これは「詠百首和歌」の中にはなく、東京大学史料編纂所蔵「高階尚俊歌集」に所収のものである。この事については、「佐河田昌俊の歌一首管見」(『日本文学研究第15号』梅光女学院大学)

「詠百首和歌」解説と翻刻 — 佐河田昌俊資料 —

本文学会、昭和54年11月)及び「高階尚俊歌集 解説と翻刻」(池田富蔵博士古稀記念論文集)近刊予定。明治書院)においてふれた。「翁草」の話は、「詠百首和歌」の存在とその流布を背景に、「吉野山花咲く頃の朝な〜」の歌が広く世に知られた歌であったことを結びつけて作られたものと思われる。

「詠百首和歌」が、佐河田昌俊の代表的な歌集として流布していたことは、「正木のかつら」(延宝三年序・宮内庁書陵部蔵)に採られた四首が、「詠百首和歌」の中にあることから知り得る。そしてその四首はすべて、中院通村の高い評価を受けたのである。

沢若菜

春はまた浅沢水の深ねせり

氷をわけて誰かつむらん

磯岩

ひまもなくよせくる波のあら磯に

うこかぬ岩の幾世経ぬらん

山家水

柴の戸にいっすみなれん世中の

うきにかへたる山の下水

鳩鶴

浦人のあさりすらしも波まより

見ゆる小嶋に田鶴なき渡る

以上がその四首であるが、「正木のかつら」所収のものは、今迄に知られる卷子本及び天理本の「詠百首和歌」のいずれとも用字が異なり、また「山家水」には「山の下水」と記されているが、卷子

本「山河の水」、天理本「山川の水」とある。別の種類の「詠百首和歌」の存在が予想される。

宗政五十緒氏は、「佐河田昌俊—近世初期の「武」
家歌人生涯—」において、「正

木のかつら」に佐河田昌俊の歌の採られていることについて、他の細川幽斎、松永貞徳、木下長嘯子などの歌の数と比較して、「昌俊の歌数の少ないのは、一つには彼の家集の知られるもののがなかったゆえではあるまいか。」と述べておられるが、採録数の少なさは編者山本春正、清水宗川等の意識によるものかと思われる。昌俊の歌集はかなり広範囲に多くの種類で流布したのである。

他に昌俊の歌集として知られるものには、先に記した「高階尚俊歌集」がある。「高階尚俊歌集」が、飛鳥井雅庸に教えを受けた頃を中心にして二十代前半から三十歳頃までの、前半生を代表する歌集であるのに対して、「詠百首和歌」は、(Ⅱ)の「老てあはれむ」、(Ⅲ)の「秋の別は老楽の」、(Ⅳ)の「老か枕にくたかけの」等の表現から推察すると、晩年期に作られた歌を中心としたものと思われる。

その他に、昌俊の歌としてまとまったものとしては、「翁草」巻百五十四「近世之和歌」の条に連作の十首がある。

浦立春

住吉の松の梢に音そへし

波にもしるく春は来にけり

浦雁

天津雁こゝをせにとぞ鳴渡る

おまへの浜の夕暮の空

浦花

あまのすむ遠山ぎくら咲にけり
よせてかへらぬ沖つしら波

浦杜鵑

住吉の浦風おもへほととぎす杜宇

松に音するならひこそあれ

浦納涼

沖津なみよせて近き秋風に

あかす長井のうらの松陰

浦早秋

あやまたず西より秋も立波の

音こそかはれ磯の松風

浦月

今ぞ見る松の木の間の霧はれて

月よりうかぶ淡路島山

浦時雨

染れども松のつれなき色はとて

浦より遠に時雨れてぞ行く

浦歳暮

年くれて今一しほの哀そふ

老をなすてそ住よしの神

むそじあまり身を浮舟の和歌の浦に

よるべもしらで朽や果まし

これらの成立時期は、末尾の歌より六十歳以後、黙々庵へ隠退した後のことであるが、「詠百首和歌」の成立時期もほぼこれに近い

頃であろう。

佐河田昌俊は近世初期を代表し、ある時点では木下長嘯子と並称される歌人でありながら、伝来の歌数の少ない歌人とされ、作品の多くないことが歌を大切にしていた昌俊の生き方と関連されるなどして考えられてきた。しかし、昌俊の歌は、「高階尚俊歌集」と、本稿の「詠百首和歌」の紹介、さらに今迄に知られていた三十数首を加えて、約二百三十首ほどが明らかになる。

稿を改めて、昌俊の歌の鑑賞、評価を試みたいと考えている。今回はその基礎的作筆である。

〔凡例〕

一、底本として、天理図書館蔵「詠百首和歌」を用いた。書誌は〔解説〕に記した。

一、仮名は現行の字体に統一し、漢字の旧字体等は、おおむね新字体、通行の字体に改めた。

一、底本の歌は、一行書きであるが二行書きとした。

一、注記等の行移りは底本に従わなかった。

一、底本には、朱で読点・圈点・詞書及び歌に記されているが、これを省いた。

一、巻末「汗墨」には振り仮名がつけられているが、これも省いた。但し巻頭の昌俊巻末の通村の注記の部分にある朱の読点、返り点、送り仮名はそのまま残した。

一、歌への注記添削は（ ）に入れた。

一、歌には配列順に通し番号を施した。

「詠百首和歌」解説と翻刻 — 佐河田昌俊資料 —

一、底本には一首脱落があるが、この点については〔解説〕に記した。

詠百首和歌

永井信濃守尚政信齋家来、山城、綴喜_一郡、黙_一々_一寺ノ開_一山、号_二懸_一壺居_一士、佐川田喜六、

昌俊上

春二十首

歳中立春

(1) 諸人のいそく心はあら玉の年のこなたに春をまちえて

山霞

(2) ふきとふくあらしの山も時ありて春にまけたる八重霞哉

春雪

(3) 半天にふるとはみえて草も木も花なき庭の春のあは雪

朝鶯

(4) 朝またきおきても楨の板戸をは只さなからの庭の鶯

澤若菜

(5) 春はまた浅沢水の深根芦氷を分てたれか摘らん

餘寒

(6) 春来ても雪かきくらしふるとしにかはらて空のさむけきやなそ

梅薫風

(7) 玉たれのひまとめて入春風に
闇の衾も梅かゝそする

行路柳

(8) 道のへの柳の枝に見ゆる哉

遠き別とおしむ心は

春雨

(下旬菟蓮法師哥の心にや如何)

(8) をやみなき春のなかめのなそもかく

楨立山の夕なるらん

若草

(10) 萌いて、草のはつかにけふる也

おもいをつけし春日の、原

春月

(11) なかむれはかすめる上の霞ぬる

老てあはれむ春のよの月

帰鴈

(すみはてぬ世のことはりもえて

(12) すみはてぬ世のことはりそ哀なる

あふは別の春の鴈かね

初花

(し有) (とくも)

(13) 時を得て見るそ嬉しき昨日まで

つれなしといひし花の下紐

(見し)

見花

(14) 花よりもうつろひやすき心かな

(色香) (の春の木の下敷)
木陰あまたにかへて見つれば

翫花

(15) 桜花たかきいやしきなそへなく

折てそかさす宮にわらやに

惜花

(16) まてしはし春の日かすも残る也

さりとてちらぬ花ならね共

落花

(17) 花さそふ布留の山風吹たえて

雪おもげなる野辺の笹原

籬歎冬

(18) 身におはぬ衣はずとも見ゆる哉

しつか籬の山吹の花

松藤

(19) 松なれば必藤のかゝる哉

こや紫のねにかよふらん

暮春

(20) 烏雲に入日の影も暮てゆく

(空さへ) (の山のは歎)

山のはさひし春は残らて

夏十首

首夏

(20) 神まつる卯月にけふは成ぬとて

いつくの祢宜もひゝらきにけり

待郭公

(22) 軒近くうへしはあやな橋に

やとかる鳥もとはて過れば

聞杜鵑 (題如何郭公歎)

(23) かくはかりうれしき物を時鳥

またて聞らん人さへそなき

早苗

(23) 植たてゝをのか心にまかせ見よ

小田の早田の時も社あれ

淀五月雨 (淀ノ字如何)

(25) 五月雨はいかに降らし汐みてる

磯の草はもよとの継はし

夏草

(26) かりにこは人やまとはんあと絶る

夏のと成て深草の里

水辺雲

(27) 夏草の茂みに水はかくれぬの

かくれぬ物はつたる也けり

納涼

(28) 山のはの雲の衣もうす墨の

夕は近き秋風そふく

夕立

(29) いつの間にかぬ秋かれて軒はより

あられたはしる夕立の空

六月被

(30) 夏はつる御被しぬらし此夕

加茂の河原に人とよむ也

秋二十首

早秋

(31) 住吉の松に音して今日のはや

西より波も秋の初風

乞巧奠

(32) 庭に焼かほりもうすく小夜深て

別に近き銀河波

(星合の空か)

(33) 暮ことにぬれつゝしほる袖の上も

たゝやとからの荻の上風

荻露

(34) 秋風も心して吹枝ながら

(をしへ) 萩の上のか

みよといさめし花の夕露

秋夕

(35) さひしさに物こそおもひ知られけれ

常盤の里の秋の夕暮

初鴈

(36) 天津鴈雲の通路幾かへり

今日は都に鳴わたるらむ

秋田

(37) うすくこく色にそみゆる秋雁

門の早わせ岡のおくて田

夜鹿

(38) 妻こふる心をしれば草枕

あはれにそ聞小男鹿の声

曉虫

(39) 蝨わか床たのむあかつきは

庭の浅茅に霜やをくらん

山月

(40) まねかれてかへる夕日も有物を

しはしは残れ山のはの月

湖月

(41) 波の上に立夕きを吹分て

月をみちひく志賀の浦風

野月

(42) 武蔵のや草の下葉に有明の

月の桂もつゆ結也

渡月

(43) 鳥もるはとはまし物をすみた川

月に都のことかたらなん

庭月

(44) 葎生て荒たるかとの庭の面に

月はわすれす主をはとふ

聞籬衣

(45) いかにせんさらてねさめはえそたえぬ

近き隣に打衣哉

関霧

(46) 難と無先たつ駒のあしおとを

しるへに越る関の朝きり

重陽宴

(47) 今日毎に雲井の庭のきくの花

つみていはへは万代やへん

杜紅葉

(48) 時雨つるあとは夕日のさしなから

染社まされ神なひの杜

河紅葉

(49) ことゝひし山のあらしの秋更て

いせきにかゝる波のくれない

九月盡

(50) 今日くるゝ秋の別は老染の

わか身にかきる名残也けり

冬十首

(51) されは社今朝は都は冬たつと

いふはかり成空はしくるゝ

寒草

(52) 駒かはんたのみもはかな人まちし

やとは薄も霜かれにけり

落葉

(53) 今是我心を分ん方そ無

木葉朽行庭の松風

冬月

(54) 冬こそといひしもあるにいかゝみて

しはすの月の名をは立けん

浅雪

(55) つきてふれはらはぬ庭の萱をたに

埋みもはてぬ今朝の白雪

積雪 (詩の心おもしろく候)

(56) 梅かえも夜の更ゆかはいかならん

軒はの竹の雪打の声

池水

(57) をし鳥の夜半のうきねの床はかり

こほちてこほる池の面哉

豊明節會

(58) 乙め子か日かけのかつらかけまくも

かしこき御代の豊の明に

浜千鳥

(59) 空にのみ妻とひわたるさよ千鳥

干潟を波の汐やみつらん

歳暮

(60) おもふことならぬなげきをすゝのねの

さも長からてくるゝ年哉

恋二十首

寄月窓

(61) 色みゆる人の心の秋の月

かこては袖をとふかけもうし

寄雲窓

(62) 人は猶はけしき風に行雲の

消ねやわか身物はおもはし

寄雨窓

(63) かきくらし雨もふり出ぬ夜も更ぬ

おもひやすてん待てもやみん

寄風窓

(64) 秋風はのきはの荻に音化て

君かこぬ夜そせん方もなき

寄湊窓

(65) 便無袖のみなとの波風に

身を浮舟の楫をたえつゝ

寄木窓

(66) 今更にとはぬ恨もえそいはぬ

心の松の色しみえねは

寄関窓

(67) 我かたに名こそその関は無物を

あやしやとはて過る頃哉

寄滝窓

(69) 数ならぬ身のおの瀧はおつれとも
人にしられぬ袖の上哉

寄原恋 (第二句いかくに候)

(68) われうにうき心の鬼をみちのくの
あたちか原にすまぬ物から

寄橋恋

(70) はすらるゝ身をうち橋の橋はしら
立名もくるし朽は果なて

寄烟恋

(71) いける身はいとひはへともあたしのゝ
烟とならん夕をほとへ

寄草恋

(72) 任吉のきしの草はの名をかりて
わが身に物をおもはずも哉

寄鳥恋

(73) うらやまし夜かれぬ水にうきねして
羽をならふるおしの諸邑

寄獣恋

(74) とゝめえぬ君かかへさにのる駒の
あしときをさへ恨てそみる

寄虫恋

(75) 詠忙ぬまたしとおもへはあやにくに
心動かす蛛のふるまひ

寄玉恋 (鎖壁の事とは聞候)

(76) いたつらに三代まで過し玉をたに
つるにおもひはとけてし物を

寄鏡恋

(77) おもひつゝねての朝けの朝かたみ
昨日にかはる我かけはうき
(そ)

寄枕恋

(78) 一度のちきりはかりはしりぬらん
あたなるよひにつけのをまくら

寄衣恋

(79) としもへぬつらき心にこりすまの
あまの衣はほして社きれ

寄弓恋

(80) 物そおもふ人のつらさはますらおか
あらきの弓の心つよさに

雑二十首 (内一首落本ノママ)

(81) 夜をのこす老か枕にくたかけの
声間はかりうれしきはなし
晚鶏 (鳥のねはかりうれしきはなし古哥二候)

夜燈

(82) 誰ならぬ夜もすからに学する
やとゝはしるし灯のかけ

嶺松

(83) 冬かれて空しき山のみねの松
(中にみどり)

としのさむさやをのか色なる

里竹

(84) 一村の里わに生るくれ竹の

よそたのしみてすむる心か

磯岩

(85) ひまも無よせくる波のあら磯に

うこかて岩のいくよへぬらん

浦船

(86) なるをかたたれか此よを浦風に

行衛も知らす出る舟人

鳴つる

(87) 浦人のあさりすらしも波まより

見ゆるこしまにたつ鳴渡

岡さ

(88) まくさかるこしかほもやれぬへし

朝夕分る岡のさくはら

江あし

(89) 春をのみ夢とはいはし難波江や

みしかきあしの世中そかし

柚山

(90) 柚人のいりぬる方そ知られける

木のみをなかつ谷川の水

岸苔

(91) かけうつすきしのひたいにむす苔の

みとりに水も流てそ行

山家水

(92) 柴の戸にいつすみなれん世の中の

うきにかへたる山川の水

山家嵐

(93) ふかく我おもひ入たる山里に

心みかほの夕あらしかな

田家雨

(94) もる雨に又敷かへむ方もなし

小田のかりほの床のさむしろ

旅行

(95) 海山のふかきあはれを等閑に

おもはゝ旅はさそなうからし

旅宿

(96) 今そ聞見ぬ唐士のかねの声

波にうきねのあかつきの空

海眺望

(97) 見てそおもふまた見ぬ人のいかならん

すまの海辺にあはち嶋山

寄社祝

(98) 諸神のやしろくくに榊葉を

さしてそいの君は千代ませ

寄日祝

(99) 天津日のあきらけきにて思ひしれ

八隅をてらす君か御かけは

汗墨三十首

通村、中ノ院也

〔追記〕

井上宗雄先生には、「詠百首和歌」の所在等、多くの御教示を受けました。深く御礼申し上げます。また、翻刻に際し快諾を与えられた天理図書館に厚く御礼申し上げます。